

『21 Lessons for the 21st Century』

橋本 大也 Daiya Hashimoto

デジタルハリウッド大学 教授
メディアライブラリー 館長

間違いなく今世界で最も注目されている歴史学者 ユヴァル・ノア・ハラリが『サピエンス全史』（人類の過去）、『ホモ・デウス』（人類の未来）に続いて、人類の現在を語るのが『21 Lessons for the 21st Century』だ。

テクノロジーが民主主義に与える影響、なくなる職業と生まれる職業、リベラリストの限界、テロリズムと宗教、「ひとつの文明」への不可避な統合、移民受け入れの是非論、教育の在り方、そして現代人にとっての人生の意味、その見つけ方など、タイムリーなテーマばかりで、21本の見事なTEDトークを聞いているかのよう。

21本の要約は難しいので、いくつかブックマークした個所を翻訳してみると、

「今日では、中国共産党が歴史上のダークサイドと自信をもって言える人はほとんどいない」（第1章 幻滅 歴史の終わりは延期になった）

「リベラルの物語は普通の人々の物語だった。サイボーグとネットワークアルゴリズムの時代にそれがどんな意味を持つか？」
「コンピュータは個人ではないので、簡単にフレキシブルなネットワークに統合することができる。だから、我々が対峙するのは、何百万人の労働者を機械に置き換えたものではない。人間は統合されたネットワークに置き換えられるのだ」（第2章 君が大人になったら、仕事がないかもしれない）

「未来になると、グーグルが私たちの代わりに（職業の）選択をするようになるかもしれない。グーグルは、あなたは（適性がないので）法律大学院に行ったり、パレエ学校に通うのは時間の無駄だから、立派な（そして幸せな）心理学者なり、配管工になれというかもしれない」

「もしあなたが良い仕事が保証されている何かを学びたいのなら、おそらく哲学というのは、それほど悪い賭けではない（AIのポリシーデザインなどの意味）」（第3章 自由 ビッグデータが見ている）

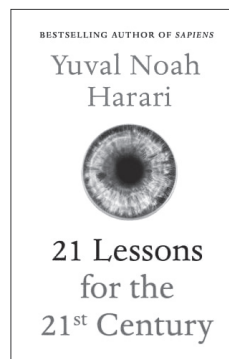
「しかしたぶん、問題なのは「私たち」がなくなることだ。おそらく「私たちの最大の問題」は、異なるグループの人間は、完全に異なる未来を持つようになることだ」

「神父は、なぜ雨乞いダンスが失敗したかを正当化する方法を知る存在ではない。我々の祈りをまったく聞いてくれない神を、なぜ我々は信じ続けねばならないか、を正当化する術を知っているのである」（第8章 宗教 いま神が国家に奉仕する）

「私たちの感情とヒューリスティクスは石器時代を生き抜くのに適しているが、シリコン時代には恐ろしいほど不適切にできている」（第15章 あなたは思っているより無知だ）

途中で日本の神道・仏教が高度成長に果たした役割であるとか、SF文学が最も良い未来予測である、など、興味深い持論が展開されていて、21講は瞬間間に過ぎていった。

後半でハラリは「メデイテーション（瞑想）」の有効性を熱く語る。人生や宇宙の究極の答えはハラリ曰く「その答えは物語ではない」からだ。ハラリは「ヴィパッサナー」という流派の瞑想で、自らの人生を革新することができたと経験を語る。脳科学のアプローチと共に、心の科学のアプローチで、人間存在の内奥に迫ることが必要だと総括する。メデイテーション、マインドフルネス。おお、ハラリよ、お前もかという感じなのだが、前作よりも筆が弾み、もっとハラリの本音や、少しシニカルな性格が露出していて、刺激的だ。



『21 Lessons for the 21st Century』
ユヴァル・ノア・ハラリ 著
発行：Jonathan Cape